

茨城県内の媽祖関連社寺に関する 現状と信仰の実態について

林 雅清・潘 宏立・安田ひろみ

要 旨

長崎や鹿児島で多数祀られている中国の海上守護の女神・媽祖の神像が、九州から遠く離れた茨城でも複数祀られていることに着目し、当地の媽祖信仰の現状を把握するため、「天妃神社」とも呼ばれる弟橘媛神社や弟橘比賣神社、媽祖像の存在が確認できた祇園寺や天聖寺（廃寺）を中心に実地調査を行った。本稿はその調査に基づく一考察である。

キーワード 媽祖（天妃）、茨城、神社、東皐心越、徳川光圀

1. はじめに

媽祖は、中国福建省や台湾を中心に、現在でも主に海上守護神として信仰される中国民間信仰の女神であり、「天妃」「天后」「天上聖母」などとも呼ばれる。北宋時代、福建路の興化軍莆田県（現在の福建省莆田市）湄洲島に住んでいた役人・林愿の娘の默娘が、神通力を得て村人の病を治すなどの奇跡を起こし、後に父が海難に遭ったことを機に峨嵋山で登仙した、あるいは父親を救うため海に身を投げて媽祖となったという伝承がある。これにより媽祖は、海上の船乗りを中心に、日本の「船玉」のような信仰を集めることとなる。

日本における媽祖（天妃）信仰は、16～17世紀頃より広がりを見せ始め、江戸時代前半には一部地域で盛んに信仰されていたようである。その信仰対象である媽祖像は、福建一帯より西日本各地に来航した明人によってもたらされ、長崎や鹿児島を中心に九州各地の唐人町や黄檗宗寺院等で祀られた。現在でも、当時の媽祖像が複数の寺院や博物館、個人宅で保管ないし崇拝されている。

中国船が多数来航した九州地方で媽祖像が祀られているのはごく自然なことであるが、先行研究¹⁾によれば遠く離れた北関東や東北地方でも古い媽祖像が祀られているとのこと、中でも

特に多く分布しているのが北関東の茨城県であったため、今回は茨城県内で媽祖に関連すると思われる神社および寺院について、文献調査を踏まえた上で、2017年8月28・29日の2日間にわたって現地調査を行った。

今回調査に訪れた場所には神社が多いが、特に海上の船舶を守護する女神として信仰されるオトタチバナヒメ（『日本書紀』では「弟橘媛」、『古事記』では「弟橘比売命」と表記）の名を冠する神社に、かつて中国の海上の女神「天妃（媽祖）」が祀られており、神社名が変わって久しい現在でも地域の人々はその神社のことを「天妃さん」と親しみを込めて呼んでいる事実もある。日本の神社および神道の民間における信仰の形態と、中国における道教と民間信仰の関係には類似するものが見出せるのではないかという見地から、以下順を追って今回の調査結果の報告と検証を試みたい。なお、写真は全て本調査時に林が撮影したものである。

2. 弟橘媛神社（磯原天妃神社）

まず、調査初日の8月28日に、北茨城市磯原町の「弟橘媛神社」を訪れる。同社は天妃山と呼ばれる海岸沿いの小高い丘の森の中にあり、かつては「天妃神社」と呼ばれ、磯原の鎮守として媽祖を祀っていたようだが、現在は無人で



(弟橘媛神社①)



(佐波波地祇神社①)



(弟橘媛神社②)



(佐波波地祇神社②)

あり、媽祖像は確認できなかった。

その足で同社を管理している北茨城市大津町の「佐波波地祇神社」を訪れたが、時間が遅かったため社務所も閉まっており、宮司の話を聞くことは叶わなかった。ただ、神社付近に住む氏子の老人から、5月の春大祭に合わせて5年毎に行われている「常陸大津の御船祭」(国の重要無形民俗文化財指定)の話を聞くことができた。船に神輿を載せて町中を人力で曳き回すという勇壮な祭りで、船底に車輪ではなく、井桁状に組んだ木枠の上を左右に揺らしながら曳いていくという²⁾。

なお、佐波波地祇神社のある山は唐帰山(からかいさん)と呼ばれ、古来より航路の目標として信仰されてきたようである。媽祖との直接的な関係は認められないようだが、海上交通の守護神として信仰されてきた両者には共通点が

見出せる。

3. 弟橘比賣神社(磯浜天妃神社)

翌29日の早朝、東茨城郡大洗町磯浜町祝町の「弟橘比賣神社」を訪れる。こちらも磯原の弟橘媛神社と同じくかつては「天妃神社」と呼ばれ、神社のある丘の名も同じく天妃山といい、媽祖像を祀って那珂湊の航海の守護神としていた。ただ、現在はここに媽祖像は祀られていないようで、天妃山自体もかつての場所とは少し異なるとのこと、そして無人である。



(弟橘比賣神社①)



(弟橘比賣神社④)



(弟橘比賣神社②)



(弟橘比賣神社③)



(大洗磯前神社①)

ただ、漁の際に引き上げられた錨が複数境内に奉納されていたことから、氏子に漁師が多い（もしくは多かった）ことが想像される。

同社を現在管理している東茨城郡大洗町磯浜町の「大洗磯前神社」を訪れ、神職（権禰宜）より話を伺ったところ、弟橘比賣神社は今でも地域の人々からは「天妃さん」と呼ばれ親しまれているとのこと。ただ、以前は行列も出て盛大に行われていた春の例大祭は、漁業関係者の減少とともに規模が縮小し、現在では媽祖行列は見られないとのことであった。

また、後日当神社より送られてきた『大洗磯前大明神本縁』（大洗磯前神社宮司飯塚重、1998年発行）によれば、大洗磯前神社を信仰する漁師たちは海難時に必ず助かるという話が数点記されており、媽祖との直接的な関連はない

なお、「天妃神社」を「弟橘媛（弟橘比賣）神社」に改めさせたのは水戸学に基づく攘夷論を展開した徳川斉昭（天保3（1832）年）であるが、弟橘媛（弟橘比賣命）は日本神話における日本武尊（倭建命）の妻で、夫の東国遠征途上、荒れる海を鎮めるため、夫に代わって人柱として海に身を投げた女性（女神）である。媽祖の伝説に通ずる逸話であり、日中間で類似する信仰の一例といえよう。

6. 天聖寺墓地

その後、我々は小美玉市小川町小川の天聖寺（跡）墓地（斎場）へ向かった。天聖寺は、祇園寺第3世の蘭山道昶が徳川光圀の取り計らいによって開いた寺院である。ただ、幕末の天狗党の乱に利用され荒廃し、明治3（1870）年に伽藍が全て焼失。その後、復興されることなく廃寺となる。墓地だけが残り、天聖寺の檀信徒は現在祇園寺に所属しているという。

墓地の敷地内の一角（入口付近）に、「天妃尊」と紹介された石造り（上部は入母屋造りのコンクリート製）の祠がある。この「天妃尊」像は小美玉市（旧小川町）の指定有形文化財になっていたため、事前に小美玉市の教育委員会生涯学習課の文化財担当を通じて墓地の管理人に依頼し、普段はお盆と彼岸の時期しか開けられない祠を開けてもらった。

両開きの木製の扉の中には、さらに木製の小さな祠（前面はガラス張り）が入っており、その中に台座（椅子）を含めて約35cm高の座像が祀られていた。冠は頭髮と判別しにくく、右手を内側、左手を外側に重ねた手には団扇を持っている。脇侍は4体、手前の男性像2体は腕の位置などから馬を引く白馬將軍（向かって左手前）と傘を持つ黄蜂兵帥（向かって右手前）と思われ⁵⁾、奥の2体は侍女のようである。

祠内部に置かれていた説明書きによると、この媽祖像は蘭山が徳川光圀より下賜されたものであり、爾来天聖寺で祀られていたが、寺が焼失した折に「天妃尊」像はある檀家が引き取り、昭和51（1976）年に天聖寺斎場が竣工した際に斎場に「返還」され、墓地内に祀られ元天聖寺檀信徒の信仰を受けるようになったとのことであ



（天聖寺墓地 媽祖像①）



（天聖寺墓地 媽祖像②）

る。ただ、管理人の話によれば、最近では開帳されている期間でも墓参に来る人が「天妃尊」に参拝する姿はあまり見られないとのこと。海岸から2.6km以上離れた漁師町ではない土地で、しかも住職個人が奉祀していた媽祖像は、土地の人々にとってどのような神仏かもわからなかったのではなかろうか。

7. 天妃神社（下津天妃神社）

最後に調査に向かったのは、鹿嶋市下津にある、その名も「天妃神社」である。ただ、ここも無人である上、小さな祠が一つあるだけの神



(天妃神社①)



(天妃神社②)

社であった。

同社を管理している潮来市の「金刀比羅神社」の宮司に電話でインタビューしたところ、茨城県内で「天妃神社」という名で宗教法人登記されている神社はここだけとのこと、ただ、中国の媽祖に関連する話は全く伝わっていないとのことであった。かつて中国地方の広島か岡山あたりから鹿嶋市に移住してきた人物が、元の地で祀っていた天妃神社をそのまま移してきたということであるが、なぜ「天妃」と称するかなど、それ以外の詳細な来歴は不明であり、氏神か土地の神として祀られていたのではないかという想像しかできないとのこと。祭神は豊玉姫命と玉依姫命（いずれも大綿津見神という海の神の娘）で、氏子によって地区の祭は行われているとのことである。

8. おわりに

以上、茨城県内の媽祖関連の社寺について、これまで何度か調査されてきた場所も含め現状調査を行ってきた。先行する実地調査から新しいものでも20年近くが経っているため、祀られ方や祭事などに関してこれまで記されていた調査結果と若干異なる現状も見られた。また、あまり調査されてこなかった下津の天妃神社に関しても情報が得られた。媽祖との直接的な関わりが伝わってはいなくとも、いずれも海に関連する信仰であることに違いはない。中国の民間信仰である媽祖信仰と、日本の民間信仰や神道、さらには仏教などの外来宗教との習合についても、今後様々な観点から検討していく余地が残されているように思われる。

媽祖はそもそも道教由来の神ではなく、福建という中国の一部地域において宋代に始まった民間信仰であり、その由来は冒頭に述べたとおり林默娘という一人の人間である。それが元の至元18（1281）年に「天妃」に、また清の康熙23（1684）年には「天后」に、それぞれ朝廷より封ぜられ、道教の神の一員として道観などでも祀られるようになる。一方、日本では例えば菅原道真が「天神」として神社に祀られるなど、人が死後神として崇められ、土着の宗教に包括されるという事例が複数見られる。むしろ、それだけで道教と神道の、民間信仰との関係における類似性を論ずることはできない。また、日本と中国以外の地域における民間信仰と宗教の関係性についても、併せて考察すべきであろう。それらの詳しい検証は、今回は調査範囲が限定されていることから今後の課題としたい。ただ、今回の調査では、民間においては何の神かわからないまま「天妃さま」として複数の神社に祀られ続けている点や、海上安全という元来の「利益」を離れて信仰され続けている点が、道教の女神とも認識される中国の媽祖信仰との類似性を感じた次第である。この点に関しても、日本における他地域の媽祖信仰の実態を調査した上で、引き続き検証していきたい。

なお、今回調査した範囲では、神社においては仮に「天妃」の由来を知らなくても祭事が行われ続け信仰が途絶えていない一方で、仏教寺

院で祀られる媽祖に関しては、信仰があまり広まっていない、もしくは深まっていないという現状も見られた。これには明治初期における廃仏毀釈の影響もあるかもしれないが、そのような中でも神像自体は大切に保管され続けたという事実がある。地元中国福建を離れ、日本の東国という異郷・異教の地で様々な形態で信仰され続ける媽祖、その実態が垣間見える調査結果となった。今後は、日本のその他の地域における媽祖信仰の実態についても調査を継続したい。

【補記】本報告は京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト「日本における海外の民間信仰と宗教の習合に関する現状調査—中国ルーツの信仰を中心に」の研究成果の一部である。

【謝辞】今回現地調査にご協力いただいた佐波波地祇神社氏子の黒沢様、大洗磯前神社権禰宜の吉田卓史様、祇園寺住職の小原宜弘様、小美玉市教育委員会生涯学習課の本田信之様、天聖寺墓地管理人の安達務様、電話調査にご協力いただいた潮来市の金刀比羅神社宮司の巻嶋瑛様に感謝申し上げます。

注

- 1) 茨城県の媽祖像に関する先行研究には、秋月観暎「東日本における天妃信仰の伝播—東北地方に残る道教的信仰の調査報告—」（『歴史』23・24、1962）、李猷璋『媽祖信仰の研究』（泰山文物社、1979）第三篇第六章「東日本における媽祖信仰の

伝播とその変容——媽祖日本伝来攷の三」（『中国学誌』4、泰山文物社、1967原載）、小松徳年「徳川斉昭の社寺改革と天妃社」（『北茨城史壇』2、1982）、野口鐵郎・松本浩一『磯原天妃社の研究』（サン・プランニング、1986）、窪徳忠「茨城県に媽祖信仰を尋ねて」（『大正大学総合佛教研究所年報』18、1996）、同氏「再び茨城県下に媽祖信仰を尋ねて」（『大正大学総合佛教研究所年報』19、1997）、同氏「徳川光圀と媽祖」（『月刊しにか』9（8）、1998）、同氏「東日本の媽祖信仰」（『アジア遊学』42、2002）、徐興慶「明清文化對徳川中期日本文化之影響——試論心越禪師之思想變遷——」（『中國文學歷史與思想中的觀念變遷國際學術研討會論文集』、国立台湾大学文学院、2005）、藤田明良「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」（黄自進主編『近現代日本社會的蛻變』、中央研究院人文社會科學研究中心・亞太區域研究專題中心、2006）、高橋誠一「日本における天妃信仰の展開とその歴史地理学的側面」（『東アジア文化交渉研究』2、2009）などがある。

- 2) 北茨城市観光協会 Web サイト>「北茨城のまつり・イベント」>「常陸大津の御船祭」<http://www.kitaibarakishi-kankokyokai.gr.jp/page/page000186.html> 参照。
- 3) 窪徳忠1996では、当時の住職から聞いた話として「千里眼と順風耳ではない」と記されている。
- 4) 李猷璋1979および窪徳忠1997参照。
- 5) 窪徳忠1996では、髪型から「千里眼と順風耳とするわけにはいかない」とのみ記されている。

ABSTRACT

Current Status and Faith of Maso (媽祖 *Mazu*)
Related Shrines and Temples in Ibaraki Prefecture

Masakiyo HAYASHI • Pan, Hongi • Hiromi YASUDA

Focusing on the fact that Chinese sea goddess “Masu (媽祖 *Mazu*)” statue enshrined in Nagasaki and Kagoshima is enshrined even in Ibaraki far away from Kyushu, we will focus on Mazu belief there in order to grasp the current situation. Field study was conducted mainly on the Ototachibana-hime (弟橘媛・弟橘比賣) Shrine also known as “Tenpi (天妃) Shrine”, Gion-ji (祇園寺) Temple and Tensho-ji (天聖寺) Temple ruins where the existence of Maso statue was confirmed. This paper is a research based on the field study.

keywords Maso (Tenpi), Ibaraki, Shrine, Toko Shin'etu, Tokugawa Mitsukuni